

ひょうごの遺跡

平成12年3月31日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
〒652 TEL 078-531-7011
-0032 FAX 078-531-7014
ホームページアドレス
<http://www.hyogo-edu.yashiro.hyogo.jp/maibun-bo>

中世の海外貿易

中世の交易、物流を考える上で、港や港町の調査は重要な意味をもっています。兵庫県では近年、中世の港町として栄えた兵庫津遺跡が調査され、そこから、倉庫や井戸、掘立柱建物などがみつき、物流の拠点として栄えた様子が徐々に明らかになってきています。兵庫津は古くは「大輪田泊」と呼ばれ平清盛が12世紀後半に大改修を行い、宋船の直接の乗り入れを図った結果、日宋貿易の中心地として大いに発展しました。この時代、各地の遺跡から出土する「貿易陶磁」が急激に増大するのは、中国大陆を中心とする海外貿易が飛躍した結果です。ここでは、兵庫県の遺跡から出土する輸入された陶磁器（貿易陶磁）の流通、消費に焦点をあてて中世の海外貿易の実体に迫ります。

——「貿易陶磁」とは何か——

「貿易陶磁」とは英語のトレードセラミックスを直訳した言葉で、日本では中国、朝鮮、東南アジアなどの国々で生産された陶磁器を指します。以前は「舶載陶磁器」、「輸入陶磁器」などと呼ばれていましたが、輸出した側も輸入した側も共通に使える言葉として、貿易陶磁と言う用語が定着しつつあります。日本で出土する貿易陶磁の大部分は中国製のもので、日本に盛んに輸入される時期は12世紀～16世紀の時期が中心です。



県内の遺跡から出土した貿易陶磁－宝林寺北遺跡、横田遺跡、古綱干遺跡（姫路市教育委員会）他－

貿易陶磁の話

中国の産地

まず、中国の産地とそこでどのような陶磁器が生産されていたのかについて見てみましょう。

中国はその中央部を東西に流れる大河長江（揚子江）によって大きく北と南に分けられます。長江の北側では白磁の生産が盛んで、河北省の定窯、邢窯が良く知られています。定窯の白磁は僅かですが、奈良時代～平安時代前期の遺跡から出土しています。また、青磁では陝西省の耀州窯、また陶器では河北省の磁州窯が有名ですが、日本からはほとんど出土していません。その他、特殊なものとしては、唐三彩を生産した窯として河南省の鞏県窯があります。唐三彩は平城京などから僅かに出土しています。

日本の中世遺跡から出土する「貿易陶磁」は長江の南の諸窯で生産されたものがほとんどです。

貿易陶磁の輸入経路

中国の南方で生産された貿易陶磁は明州、現在の寧波市から東シナ海を通して海路日本に運ばれました。

日本の玄関口の一つが福岡県の博多、もう一つの中継基地は当時独立国であった琉球（沖縄）です。この二つの窓口を通じて貿易陶磁は日本の各地の港へ運ばれて行きましたが、中には坊ノ津（鹿児島県）や兵庫津のように、直接中国船が寄港する港もありました。



定窯産の白磁碗（瀬布ヶ森西遺跡）



白磁輪花皿（瀬布ヶ森西遺跡）（日高町教育委員会）



第1図 中国の主な窯跡と日中交易路（『瀬戸内の中国陶磁』1991年 広島県立歴史博物館に加筆）

白磁

白磁は華南産白磁と呼ばれ、福建省・広東省内の窯で生産されたと考えられていますが、産地は特定されていません。高台を浅く削り出し口縁部が玉縁状に厚く成形されるもの（Ⅳ類碗）と、高台を高く細く削り出し口縁部を外側に折り曲げるもの（Ⅴ類碗）が兵庫県下の中世遺跡から必ずと言っていいほど出土しています。最近、中国の福建省廈門市近くの廈門碗窯でⅣ類碗が生産されているのが確認され、産地の一つと考えられています。



華南産白磁（宝林北遺跡、初田館跡他）

青磁

青磁の産地には浙江省の越州窯、龍泉窯、福建省の同安窯があります。越州窯は中国で最も早く青磁の生産に成功した窯で、古く後漢の時期から生産しています。日本では奈良～平安時代前期の遺跡で越州窯系青磁が出土しており、それを模倣した緑釉陶器が生産されています。龍泉窯は越州窯にかわって江南地方の青磁生産の中心になった窯で、北宋代に生産を開始し、南宋代に最盛期をむかえます。日本に輸入されたものには、(1)文様のない無文碗、(2)主に内側に片切彫りの草花文を施す劃花文碗、(3)外側に蓮の葉の文様を施す蓮弁文碗などがあり、特に蓮弁文碗は中世を通じて大量に輸入されています。福建省の同安窯では、内・外面に櫛状の工具で文様をつけた粗製の青磁の碗・皿を生産しており12世紀後半～13世紀前半にかけて日本に多く輸入されています。



同安窯系青磁（横田遺跡、古網干遺跡他）



青磁劃花文碗・皿（横田遺跡、宮脇遺跡他）



青磁蓮弁文碗・無文碗・雷文帯碗（宝林北遺跡
古網干遺跡、福西遺跡）

す。この青磁は後に、室町時代中頃の茶人村田珠光の好む所となり、珠光青磁と呼ばれて、茶人の間では珍重されています。

青白磁

青白磁の梅瓶、合子、皿などは主に江西省の景德鎮窯で生産されています。ただ、遺跡から出土する青白磁には粗製のものも多く、景德鎮窯以外の窯で焼かれたものが含まれていますが、窯は特定されていません。

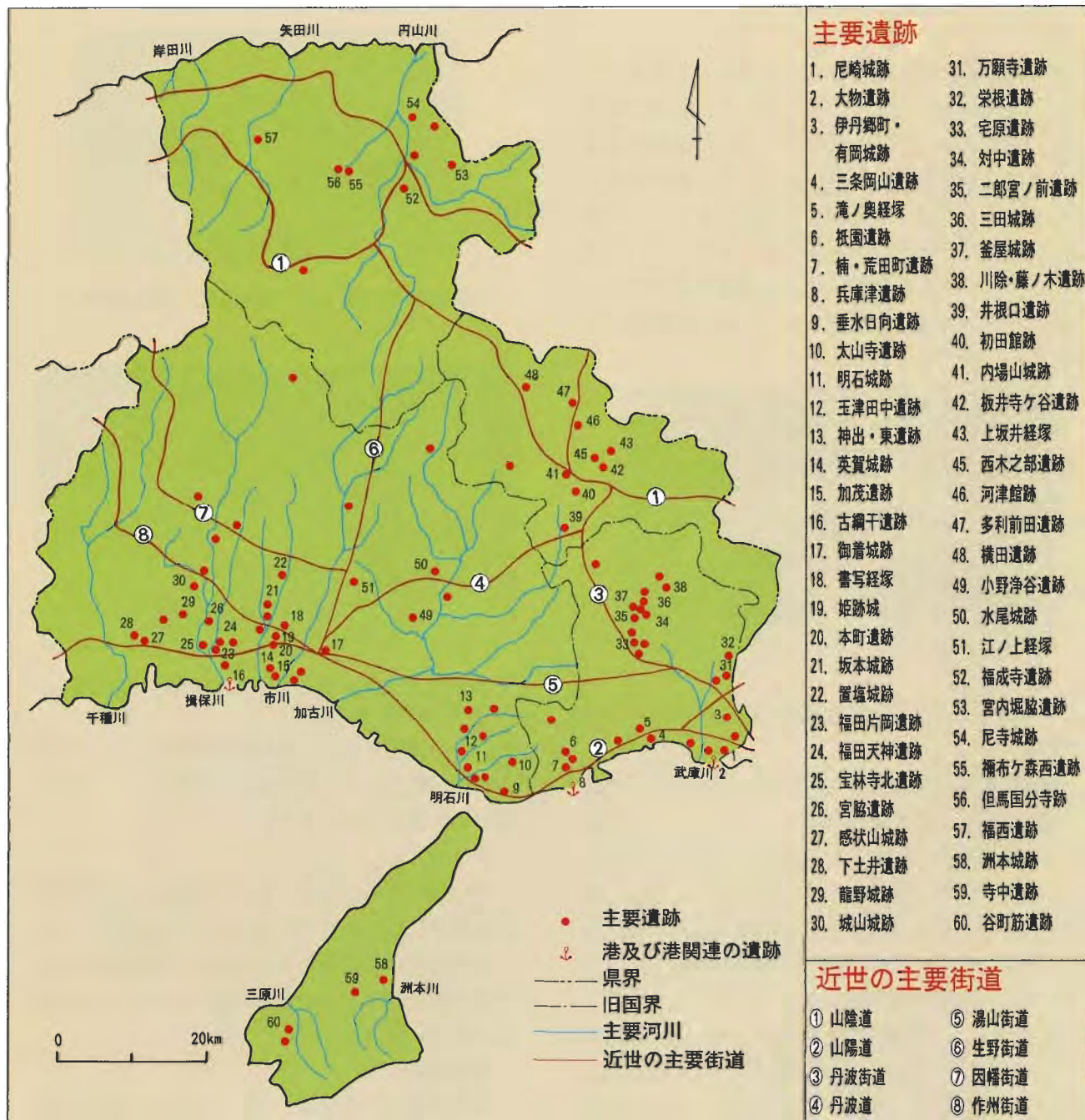
青花磁器

青花磁器（染付磁器）は元代に景德鎮窯で生産が開始されます。元代の青花の日本での出土は僅かですが、16世紀に入ると青花磁器の輸入が本格化します。これらの製品は主に景德鎮窯の民窯で生産されたものです。青花磁器には他に、呉須と呼ばれる呉須（青花磁器の顔料）の発色の良くない粗製の青花磁器があり、福建省の廈門市付近の漳州窯で生産されたことが最近明らかになっています。

その他の陶器

この他に主に天目茶碗を生産した江西省の建窯、吉州窯の製品が僅かに輸入されています。

また、褐釉、黒釉などの陶器も窯跡は特定されていませんが中世を通じて輸入されています。



第2図 兵庫県下貿易陶磁出土主要遺跡分布図

兵庫県下の中世の港の調査

尼崎市の^{だいもつ}大物遺跡は瀬戸内から京に至るルートの玄関口として栄えた港で、平成7年度の調査では、大量の中国製の貿易陶磁が出土しています。また、最近調査された姫路市網干区^{ふるあはし}の古網干遺跡も港に関連する遺跡と考えられており、13世紀から15世紀代に及ぶ貿易陶磁が多量に出土しています。また、博多と並ぶ中世の中国貿易の中心であった神戸市兵庫区の兵庫津遺跡も近年の調査で漸く中世の港町の様子が明らかになりつつあります。



倉庫の基礎（兵庫津遺跡）

消費地での出土状況

さて、日本に運ばれた貿易陶磁はどの様に使われたのでしょうか。以前は、それらは高級品とされ、貿易陶磁を手にした階級は当時の支配層であったと考えられていました。しかし、遺跡の調査が進むにつれて、白磁、青磁の碗・皿はほとんどの中世遺跡から量の多い少ないに差があるものの、ごく普通に出土することが分かってきました。その使われ方としては墓や、経塚に埋葬されたものと、集落遺跡から出土するものと大きく分けられます。

特に中世の前半では経塚や墓から出土する貿易陶磁が目立ちます。経塚からの出土例としては加西市の江ノ上経塚、篠山市の^{かみいたい}上板井経塚、神戸市の滝ノ奥経塚などがあり、いずれも青白磁の合子が埋納され



青白磁の合子（上板井経塚）

ていました。

また、墓への副葬の例としては、龍野市の福田片岡遺跡、篠山市の^{はつだやかた}初田館跡、氷上郡氷上町の横田遺跡などがあり、白磁、青磁の碗・皿が出土しています。また、氷上郡春日町の多利前田遺跡では白磁皿、青白磁合子・壺が副葬品として埋納されていました。

しかし、13世紀後半以降になると、経塚や墓への貿易陶磁の埋納は少なくなります。また、集落から出土する貿易陶磁の量も少なくなります。ただ、量は減少するものの、器種はかえって豊富になり、た

墓から出土した青磁の碗・皿
(横田遺跡)出土状況
(拡大)青白磁の小壺
(多利前田遺跡)

白磁水差し（玉津田中遺跡）

例えば青磁では碗の他に鉢、^{ばん}盤、^{びん}瓶、香炉などが見られるようになります。14世紀後半から15世紀代になると、その出土量はさらに減少します。

中国製の貿易陶磁が再び大量に輸入されるようになるのは16世紀に入ってからです。

姫路市の御着城、出石町の宮内堀脇遺跡、三田市の三田城、篠山市の初田館跡など16世紀の城跡、館跡からは景德鎮の民窯で生産された青花磁器が出土しています。16世紀後半から17世紀初頭になると、景德鎮窯産のものに加えて福建省の漳州窯で生産された粗製の染付磁器が伊丹郷田遺跡などから出土しています。その後、17世紀の前半に肥前有田で磁器の生産が始まると貿易陶磁は急速に姿を消し、肥前産の陶磁器にその市場を奪われて行きます。

このように、中世の貿易陶磁の受容のあり方には時代によって変化がみられます。これには、産地での生産の問題、貿易政策の変化、日本国内での嗜好の変化など様々な要因が考えられます。14世紀以降の貿易陶磁の器種の多様化には茶陶の普及が影響しています。また、15世紀代の出土の減少には、龍泉窯の衰退の他に、明の^{かいきんさく}海禁策（貿易の制限策）があると考えられています。



掘立柱建物跡（宮内堀脇遺跡）

「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」

—震災復興の発掘調査を検証する—

このシンポジウムは阪神・淡路大震災5周年を前に、埋蔵文化財調査の視点から震災復興の発掘調査を振り返るもので、会場には震災後、全国各地の地方自治体から発掘調査の支援のために赴任された職員のほか、被災市町の関係者や一般県民・市民、報道関係者など、約350名の参加がありました。

(1) 第1部では、埋蔵文化財調査事務所の大村敬通副所長が基調報告として、震災発生直後から発掘調査実施にいたるまでの経過や発掘調査体制などについて、自身の経験を交えて振り返りました。さらに震災後の復興事業に支障のない発掘調査のあり方や、平成7～9年度に全国の自治体から延べ121人の支援職員の応援を得て、暗中模索のなか発掘調査を実施した経緯を報告しました。

基調報告のあと、復興調査の中でも注目された発掘調査3ヶ所の成果発表を行ないました。

1. 尼崎市武庫庄遺跡（弥生時代最大級の神殿建物）
千葉県教育庁 半澤幹雄
2. 神戸市兵庫津遺跡（中世の貿易港）
埋蔵文化財調査事務所 岡田章一
3. 尼崎市猪名庄遺跡（奈良時代の東大寺領荘園）
尼崎市教育委員会 山上真子

(2) 第2部では、復興事業に対して、全国の各自治体専門職員の支援のもと県教委では被災各市町と埋蔵文化財調査をおこなってきましたが、その必要性や成果や課題などを研究者、行政、マスコミ、市民団体など下記の方々からの意見をもとにして検証しました。

〔コーディネーター〕原口正三

〔パネリスト〕和田晴吾・古山桂子・藤田明良・岡村道雄・寒川 旭・川本ミハル・中田 英・禰宜田佳男・東 和幸・渡辺伸行・大村敬通

1. 震災直後の発掘調査の是非

震災直後、「復興」はすなわち生活復興であり、

このような未曾有の大災

害時にも文化

財保護

法を

本
当に

遵守すべき

なのかという疑問が、

当事者間のなかでもありました。

埋蔵文化財担当職員の多くは自らも被災しており、震災との関わり方で、文化財に対して様々な考え方が生まれたのは、当然と考えられます。

2. なぜ発掘が可能だったか

被災した埋蔵文化財は280遺跡、約250ha(10市10町)にものぼり、住宅供給など復旧、復興事業を急がなければならない状況を見ると呆然とする調査



シンポジウム開催報告

平成11年12月4日 於：ピフレSHIN-NAGATA

量をまえに、整然と発掘調査をすすめることができたのは、国や各地方公共団体などによる特別な行政措置(法的緩和、財政援助、人的援助)があり、それが迅速・的確に行われたためでした。そして、何よりも被災地内の住民の方々が埋蔵文化財に対して、理解を示し、発掘調査が可能になったことが重要であると言えます。これは埋蔵文化財に携わる者が、常日頃から埋蔵文化財に対しての理解を、国民全体に求めてきた結果のたまものといえるでしょう。

3. どう評価されるのか

被災地内での調査にもかかわらず、調査を否定する声も聞かれず、現地説明会の開催などを自粛傾向にあった各行政機関に対し、発掘調査現場周辺の県民から現地説明会開催の要望が多く届きました。さらに現地説明会に参加した住民の方々からは、「もっと自分たちの住んでいる土地の歴史を知りたい」という声や、「ここが自分たちの『ふるさと』だと誇りに思いたい」との声があがったり、住民主体の勉強会も企画されました。

さらに支援職員の間からは、この震災復興調査を契機として、青森県〜鹿児島県までの広範囲にわたる1都2府33県4政令指定都市の支援職員ネットワークが生まれたので、今後さらに、新たな交流関係が発展する事を期待したいという意見も出されました。



熱心に耳を傾ける参加者

4. 今後に残された課題とは

文化財保護法が制定・施行された昭和25年以来、自然災害による埋蔵文化財の発掘調査を実施するために、全国から埋蔵文化財専門職員の支援を受けて実施する方法は、日本の埋蔵文化財行政史上初めて採用された画期的な処置でした。しかしこれは、前例のない手探りの状況のなかで行われ、復興調査という性格上、現地での発掘調査が最優先され、室内作業である出土品整理作業をはじめとした報告書作成・刊行については、二次的にしか考えられていませんでした。



現地説明会風景

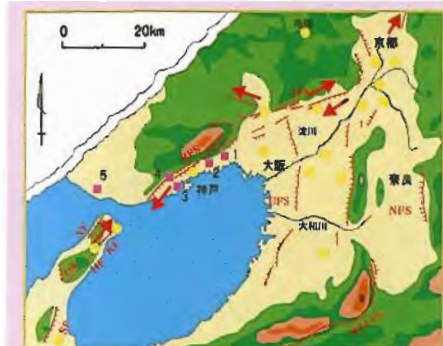
昨今、ボランティア活動は日本の中で認知され、行政と連携して様々な行動が行いうる状況となっています。そのため埋蔵文化財の調査、特に出土品整理や、報告書作成といった室内作業について、県民の協力体制を従前から整えておくべきではという意見が聞かれました。

★今回の震災は2度と起こってほしくない災害ですが、仮に同様の災害が発生したとしても、兵庫県で得た貴重な教訓が生かされることを願うばかりです。



地震考古学と 復興調査5年の歩み

阪神・淡路大震災の復興と埋蔵文化財Ⅴ



1995年に活動したのが NPS:野島断層
1996年に活動したことが判明したのは
AFS:奈良-高槻構造線断層系
HIF:新大阪断層 OF:野田断層 SF:美山断層
1996年に活動した可能性が高いのは
RFS:大甲断層系 KF:橋本断層
その他の活断層系は
NPS:上町断層系 ADFS:中央構造線断層系
NPS:新大阪地塊断層系
震災復興調査で地震の痕跡を検出した遺跡
1:豊島・高槻 2:住吉東町・豊島 3:長瀬
4:上沢・御前・長田神社境内 5:豊島
その他の震災直後に発生した可能性の高い地震痕跡
を検出した遺跡

地震の
発生

原因

一定の
周期

活断層の活動

活動周期は千年を越すものが多い

プレートの活動

地震の周期は90~150年

周期を求める方法

文 献

遺跡の地震痕跡の検証

- 発生時期がわかります
- 地表の変化(被害の状況)がわかります

地震災害を
地震
考古学
予測・検証

最近の発掘調査によって多くの地震の痕跡が発見されています。これらの地震の痕跡を調べる分野を地震考古学といいます。そして、発掘調査と地震考古学によって、地震の活動時期や地表の変動について知る手がかりが得られるようになりました。

そこで、今回の展示では、地震考古学の解説と地震に関する重要な情報を与える発掘調査の成果ならびに阪神・淡路大震災における復興調査5年の歩みについての紹介を行いました。

シンポジウムに合わせたのわずか1日の展示会でしたが、350人の多くの方々にご覧いただき地震に対する理解を深められたと思います。私たちはこれらの成果を踏まえ、今後の発掘調査において地震の痕跡を注意深く観察し、私たちの暮らしに生かさないといけないと考えています。

(通産省地質調査所 寒川 旭氏のご協力と科学技術庁発行『大地震のあと、余震はどうか』を参考としました。)



文献や遺跡で
発見された
地震痕跡より

二十一世紀の中頃に
南海地震と東海地震は、ほぼ
同時に発生すると考えられます



編集後記

今回は貿易陶磁に焦点をあて、中世の交易、物流について考えてみました。貿易陶磁の消費地での出土状況については、ある程度分かってきましたが、それがどのような経路で運ばれたかについては実はよく分かっていません。その意味で兵庫津遺跡などの港の調査が重要になっています。(S.O)